

研究機関名：東北大学

受付番号：	2013-1-150
研究課題名	上顎洞真菌症に寄与する解剖学的バリエーションの検討
研究期間	西暦 2013 年 7 月（倫理委員会承認後）～ 2013 年 9 月
対象材料	<input type="checkbox"/> 病理材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 生検材料（対象臓器名） <input type="checkbox"/> 血液材料 <input type="checkbox"/> 遊離細胞 <input checked="" type="checkbox"/> その他（CT データ）
上記材料の採取期間	西暦 2003 年 1 月～ 2013 年 3 月
意義、目的	副鼻腔炎の中には真菌感染によって引き起こされる真菌性副鼻腔炎が存在する。真菌性副鼻腔炎は上顎洞にもっとも多く発生し、診断は病理学的に真菌塊の確認によって行われる。発症経路には鼻腔のガス交換に関する経路と歯科治療などの医原性経路が考えられているが、いまだ決着はつけられていない。細菌性上顎洞炎の発症については解剖学的原因による換気とは無関係であると考えていられるが、真菌性副鼻腔炎については十分に検討されていない。本研究では上顎洞換気に関する、鼻中隔湾曲、ハラーセル、中甲介の解剖学的バリエーションに注目し、多変量ロジスティック回帰分析を使用して、上顎洞菌球の発生における解剖学的危険因子の関係を分析する。
方法	2003 年 1 月から 2013 年 3 月までに手術が行われ診断が確定された一側性の上顎洞真菌症の患者を対象とする。術前に撮影されている CT 画像を用いて、鼻中核湾曲の強さと方向、中甲介の異常、ハラーセルの存在について患側と健側を比較し解剖学的バリエーションの影響を検討する。解析は多変量ロジスティック回帰分析を用いる。
問い合わせ・苦情等の窓口	東北大学病院 耳鼻咽喉・頭頸部外科 医局 TEL 022-717-7304 野村和弘 大島英敏